

Title	現代日本語における連体修飾語の語順の傾向
Author(s)	呉, 玗定
Citation	大阪大学, 2000, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/42205
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏 名	呉 珉 定
博士の専攻分野の名称	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	第 1 5 7 0 5 号
学 位 授 与 年 月 日	平 成 1 2 年 9 月 2 5 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第 4 条第 1 項該当 文学研究科日本学専攻
学 位 論 文 名	現代日本語における連体修飾語の語順の傾向
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 工藤真由美 (副査) 教 授 真田 信治 助教授 石井 正彦

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、現代日本語における連体修飾語の語順の傾向を網羅的に記述し、それを支配する諸条件を明らかにしたものである。「第 1 部 本論文の枠組み」「第 2 部 連体修飾語の語順の傾向」の 2 部より構成され、400 字詰原稿用紙にして 441 枚からなる。

第 1 部は、2 章から構成され、連体修飾語の語順の傾向を分析するための前提を述べる。第 1 章では、本論文の方法論を示している。語順を考察するにあたっての単位は単語であること、連体修飾語の全体的な分析手順として品詞論的分類を採用することを提示するとともに、連体修飾語の語順が絶対的なものではないとすれば、大量の実例に基づいた帰納的分析方法が有効であるとする。第 2 章では、連用修飾語についての先行研究を踏まえた上で、連体修飾語の語順の傾向を支配する一般的条件として、「長さによる条件」「構文的要因による条件」「修飾語の意味的相互関係による条件」の 3 つがあることを前提に分析を行なうとする。

第 2 部は、7 章より構成され、連体修飾語の語順を支配する条件のうちで最も重要な「構文的要因による条件」について、品詞論的分類と構文のかかわりの違いを考慮した上で、具体的な分析を行なっている。まず、名詞、形容詞、動詞の 3 大品詞について、順次考察を行い、[動作的かかわりの動詞 > 状況的かかわりの名詞 > 所有・所属的かかわりの名詞 > 属性的かかわりの動詞 > 形容詞 > 属性的かかわりの名詞] という語順の傾向があることを明らかにしている。さらに、形容詞的修飾語、副詞、数量詞、連体詞、指示詞についても考察を行い、[形容詞的修飾語、副詞 > 形容詞、属性的かかわりの名詞] [状況的かかわりの名詞 > 数量詞、連体詞、指示詞 > 形容詞、属性的かかわりの名詞] という語順の傾向があることを明らかにしている。

最後に、本論文の結論として、連体修飾語の語順の傾向は、次の 3 つの条件に支配されているとする。

- (1) 長さによる条件：長い修飾成分は短い修飾成分の前に置かれやすい
- (2) 構文的要因による条件：「動作的かかわり」「状況的かかわり」のような外的な修飾語は、「属性的かかわり」のような内的な修飾語の前に置かれやすい
- (3) 意味的相互関係による条件：複数の修飾語の間に意味的限定関係がある場合には、限定する修飾語が前に置かれる

論文審査の結果の要旨

本論文は、これまで本格的に研究されていなかった現代日本語の連体修飾語の語順の傾向を明らかにした最初のものである。文学作品、シナリオ等から25000例にのぼる実例を収集し、統計的な数値を示しつつ、形態論的、構文論的、意味論的観点からの総合的な分析を通して、現代日本語の連体修飾語にも一定の語順の傾向が存在することを客観的に提示したことは高く評価される。具体的には、連体修飾語の語順の傾向を支配する条件には3つのものがあること、特に、「動作的かかわり」の動詞、「状況的かかわり」の名詞、数量詞、指示詞のような外的修飾語は、「属性的かかわり」の名詞、形容詞、動詞の前に置かれやすいことの指摘は、英語や朝鮮語との対照言語学的あるいは類型論的研究への新たな展望を切り開いたものといえよう。

ただし、連体修飾語の語順の傾向を支配する条件として、これ以外に「情報の新旧」や「修飾の限定性の有無」といった語用論的条件を考える必要があるのではないかとの疑問は残る。実際の談話資料等も視野に入れたディスコース論的観点をも考慮することによってさらなる進展が期待される。また本論文の最後にも指摘してあるように、今後の課題として、「内的かかわり」「外的かかわり」の内実あるいは本質規定に向けてのよりつっこんだ分析が望まれよう。

以上のような問題点はあるが、本論文は、未開拓に近かった現代日本語の連体修飾語の語順の問題に対するはじめての包括的分析であって、従来水準を超える内容を多く含んだものである。よって、本審査委員会は、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。